

〔書評〕

## 平野芳信著 『ハルキ、ハルキ』

徐 忍 宇

(全北大学校講師)

『ハルキ、ハルキ』(『하루키, 하루키』、2012年10月、志学社)は、2011年に出版された著者の『村上春樹 人と文学 (日本の作家100人)』(勉誠出版)の韓国語版である。赤のハードカバーにはより小さい文字で「ハルキの人生、ハルキの文学」というサブ・タイトルが付いている。文学研究書としての重みと内容の厳密さを備えた原著に比べ、ポップな表紙デザインからして、文学研究書と言うよりは一般の読者向けの教養書と言った印象である。本の中身もそのような期待を裏切らない体裁になっている。出典が忠実に記されている原著に比べ、翻訳書におけるすべての引用文には出典が大胆に省略されている。さらに、日本の地名、場所名などの固有名から具体的なイメージを喚起し難い韓国の読者のために、本の随所には説明写真が挿入されており、村上春樹の読者なら誰でも気軽に手に取ってみたいくなるように工夫されている。

韓国における村上春樹の人気は他の追随を許さないほど、極めて高い。今年7月に翻訳出版された春樹の最新作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』は、20万部に及ぶ初版があつという間に売り切れ、現在(10月)は第2刷が発行されている。「村上春樹

シンドローム」と呼ばれているこのような現象は今に始まったことではなく、『フルウエイの森』が翻訳された1990年代半ば以来、凡そ20年にわたって続いている現象なのである。また韓国は、村上春樹の作品がもつとも多数翻訳された国としても知られている。にもかかわらず、村上春樹に関する解説本や研究書、入門書などの関連書籍の数はほんの僅かであり、しかも今まで韓国語に翻訳された研究書は小森陽一の『村上春樹論『海辺のカフカ』を精読する』(2007年、高麗大学出版部)など、幾分偏りのある著作に限られていた。村上春樹の全体像が把握できる、より公正な解説本の出版が求められている韓国の出版事情を踏まえて考えると、『ハルキ、ハルキ』の出版は非常に有意義であると言える。

本書は「ハルキの人生、ハルキの文学」というサブ・タイトルからもわかるように、1部は村上春樹の評伝、2部は「風の歌を聴け」から『1Q84』までの代表作の作品鑑賞という、2部構成になっている。ごく一部を除けば評伝部分は原著の内容がそのまま翻訳されているが、2部の作品鑑賞の部分では原著に載せられている相当数の短編作品が割愛されている。詳しく言えば、原著での「貧

乏な叔母さんの話」「納屋を焼く」「プールサイド」「パン屋再襲撃」「ファミリー・アフエア」「トニー滝谷」「アフターダーク」(長編としては唯一省かれている)の作品解説が省かれている。おそらく本の厚みを減らすための苦肉の策——分がち書きのため、日本語をハングルに翻訳するとページ数がかなり増える——であろう。これらの短編はすべて韓国語の翻訳があるものの、他の長編に比べて認知度が低くあまり注目を集めることはなかった作品である。もし今後の改訂版において今回省かれた部分が翻訳されることがあれば、村上春樹の短編作品にスポットライトが当てられる良いチャンスになるのではないかと思われる。

評伝の部分で唯一割愛された箇所は、原著における「明確な理念のある疲れと明確な理念のない居心地の悪さ」の部分である。この部分は『やがて哀しき外国語』での記述をもとに、村上春樹における「デタツチメント」から「コミットメント」への転換の契機を探ろうとしたものであり、研究者の立場から見れば重要な箇所である。著者はここで、村上春樹がプリンストン大学時代に「両親と同じ職業(＝教員、引用者注)(傍点原文)を体験することによって「親子、という縦の連帯」意識、つまり歴史意識に目覚めた可能性を模索している。本書はあくまでも一般読者向けの客観的な評伝として翻訳されたもので、分量を減らす際に仮説の範疇に入る部分を省いてもさほど問題がないと思われるが、個人的にはこの箇所が冒頭の「父と母」と終盤での「ふたたび、父千秋氏のこと」とを結びつける大事な部分に思われたのでそのまま残してもよかったのではないかと思つた。

著者は、芥川賞の落選体験が村上春樹においてある種のトラウマ

として残っていることを明らかにした点に本書の成果があると、韓国語版の序文のなかで述べている。それとともに本書のもう一つの成果は、今まで漠然としていた作家の親子関係が作品に及ぼした影響について様々な手掛かりを提供しているという点にあるのではないかと思う。本書を読みながらおのずと村上春樹の『アンダーグラウンド』を思い浮かべた。文学研究者の著書にありがちな穿った仮説、主観的な価値判断を排除し、色々なインタビューやエッセイに散乱している断片としてのコメントを丹念に掻き集め、ひとつの全体像としての村上春樹の人生を見事に浮かび上がらせるという筆者の書き方は、個人的な意見を極力抑え、可能な限り他人の話に耳を傾けるという『アンダーグラウンド』の書き方と、どことなく共通するところがあると思われたからである。

(SEO INWOO)